

実習における対児ストレスとソーシャル・サポートとの関連
—本学と他大学との比較—

実習における対児ストレスとソーシャル・サポートとの関連 —本学と他大学との比較—

Relation between a childcare stress and social support in practice teaching — Comparison of the Ueda Women's Junior College and other universities —

野 島 正 剛

Nojima Seigou

要 旨

今後の実習指導の体制やサポート，学生が実習で受けるストレス，実習のドロップアウトなどの対応には，地域性などの諸条件の違いから本学学生のソーシャル・サポートや対児ストレスの状況を知る必要がある．そこで，他校との比較検討を行いながら，本学の状況を調べた．その結果，本学と他大学との学生間で，ソーシャル・サポートや対児ストレスに大きな差はなかった．実習の自己評価とサポート源の関連から，母または教師からのサポートが得られていると感じている場合には，自己評価は良いものになっていた．また，「実習に行きたくないと思ったことがありますか」との問いと実習の自己評価とのあいだは負の相関であった．

キーワード：教育実習 保育実習 ソーシャル・サポート 対児ストレス 実習指導

問題と目的

子どもは家庭や地域社会の中で保護され，人々とのふれあいの中で様々な経験を積み重ね，自立に必要な知識や能力を身につけていく．しかし，子どもの健全な成長に大きな影響を与える環境である家庭や地域社会は，大きく変化しつつある．子育てにおいて大きな互助を担ってきた地域社会は都市化や地域住民の意識が変化し，人間関係が希薄になってきつつある．また，長引く不況は，父親の育児参画に大きな影響を及ぼし，母親と教育機関が子育てを担う傾向を強めている．核家族化や離婚の増加，ひとり親，家庭の外的な変化や養育・教育といった機能の低下も起こっている．性（役割）差の変化や女性の就労や高学歴化，家族や子どもに対する価値観の変化は，親役割や育児，そして子どもを持つことそのものに対する意識の変化をもた

らした（柏木ら 1999）. 子どもを産むことに対する「女性は子どもを産むのが当たり前」「子どもを産んでこそ一人前の女」といった理由は後退し、自分の欲求と条件によって産むという人生計画の一部の選択肢に変化しつつある（柏木 1998）. 一方子どもの側にもストレス耐性の低下や問題行動の増加、自傷行為の増加が問題となっている. このような変容の中、少子化、育児困難、児童虐待の増加といった問題に対応するために子育て支援施策として、社会的な支援の拡充が行われている.

筆者は、以前社会福祉士を養成する実習にかかわり、現在は保育士・幼稚園教諭を養成する実習にかかわっているが、これらの専門職は子育て支援を実行し、専門的知識と利用者の要求を受け止めながら健全な成長発達を支援する役割を担っている. このような家庭や社会状況を背景に、学生は保育・教育・福祉といった高度な専門的知識と資質を身につけようと学習している.

ところで、L'Abate,L. は対人関係の発達理論において、セルフを①類似性の連続という視点、すなわち継続的な、一生涯続く、関係ある他者との比較という視点. ②「私も重要である. あなたも重要である. など」のような関係的な意味での自己と関係ある他者への重要性の帰属のさせ方という視点. ③個人が、家族からの肯定的、否定的、もしくは中立的な影響に対応してどのように自分の人生の行路を決めるかの選択過程を検討すること. という枠組みで説明した. 家族が個人にどのように影響を与え、個人が家族にどのように影響を与えているのか、その両方を円環的に捉えることが対人関係の発達を知るうえで必要である. また Sullivan,H.S., や Erikson,E.H. は、親子、きょうだい関係や地域社会における異年齢・同年齢・異性・同性との関係が対人関係の形成に重要な意味をもつことを明らかにしたが、これらを踏まえて、一人ひとりのありようを過去や未来を通じて推しはかるときに、近年の家庭や社会の変化、特に希薄な人間関係や家族関係が対人関係の形成に影響を与えていることは考慮しなければならない点であろう. 筆者がかかわっている学生も、これらの影響を受けていることを考慮する必要がある.

看護はすべての人間を対象にしているが、高澤（2001）は看護師を目指す看護学生を対象に、小児看護学受講前に行われることの多い保育所・幼稚園実習の効果を調べたが、その際に子どもが嫌いだと回答した学生は22人中2人いた. また、学生全体の傾向として、子どものイメージが抱けず、子どもの理解が困難になっていることを明らかにした. 幅の広い年齢を対象にした活動を行う看護学生や、消極的ながら、子どもを産むことを選択した母親になろうとする女性の中には、子どもがあまり好きではないという感情をもっている人も少なからず存在することが推測される. 筆者がかかわる学生は、社会福祉士・保育士・幼稚園教諭を目指す学生であり、基本的に子どもが好きであるという前提で実習に送り出している. しかしながら、教育実習・保育実習中に子どもに対する嫌悪感をもった学生や、子どもが好きだからと児童系の施設（児童養護施設・児童相談所など）を選んで社会福祉士の実習に行った学生が、子どもに対する不快感をもって実習から帰ってきたこともあった. これらの資格取得を目指す学生が、保育所・幼稚園・児童系の施設でどのようなストレスを受けているのかは、明らかになってい

ない。

教員・専門職のストレスは、子どもへの否定的感情や多忙感が蓄積疲労をおこし、職場内サポートがそれを軽減させることが明らかになっている（田中 1999）ことから、教育実習・保育実習時のストレスも職業に近い状態で子どもとかわるため、教員や専門職が受けるものに類似した対児ストレスを受けるのではないかと考えた。対児ストレス軽減には竹田ら（1999）は「重要なネットワーク構成員」が有効だとしているが、実習時にも「重要なネットワーク構成員」が対児ストレス軽減に有効ではないかと考えた。この「重要なネットワーク構成員」とは、近くにいて信頼関係があり、気軽に呼べるという条件があげられ、これを満たす身近な人間がストレスを軽減させるとしているが、実習時に「重要なネットワーク構成員」となるサポート源は誰なのか検討を行った。これまでの研究で明らかになった事柄は以下の点である。

1. 実習時にも専門職と同様に対児ストレスがあることが明らかになった。
2. 実習時の対児ストレスとソーシャル・サポートの二つの属性の間には、関連があることがわかった。これは、育児などのストレスとソーシャル・サポートの関係を扱った先行研究と同様の結果であり、実習時の対児ストレスについても、高いソーシャル・サポートがストレスを低減させる有効な手段であることがわかった。
3. ソーシャル・サポート尺度とサポート源との関係をみると、ソーシャル・サポートが高いと思っている学生は、すべてのサポート源からのサポートも高いと認識しており、特に友人知人と母が高い値であった。
4. ソーシャル・サポートが低いと思っている学生も、友人知人からのサポートは高いと認識していたが、母・父・きょうだいからのサポートは低い値であった。母は、友人知人より著しく値が下がっている。また、先生は上位群・下位群ともに低い値である。

下位群においては、母を含めて家族は低い値であったことから、家族からのサポートが低いと感じている場合、自分に対するソーシャル・サポートを低く感じる。友人知人は有効なサポート源であり、下位群であっても高い値であった。このことにより家族、友人知人は重要なネットワーク構成員であることがわかった。

5. 重要なネットワーク構成員は、近くにいて信頼関係があり、気軽に呼べるという条件が上げられているが、先生からのサポートが低いと感じられる理由として、サポートしてほしいときに、近くにいる、気軽に呼べるという条件を満たしていないことから、サポートを低いものと認識していることが考えられる。

以上の点を筆者らは既に発表したところである（野島・三好 2003）。

筆者らが上述の研究で調査を行った私立A大学短期大学部（以下A大学）は関東に位置し、全国から学生が集まってきており、幅広い生活体験をもった学生がいるのではないかと予測された。本学はA大学と異なり、県内と新潟県を出身地とする学生がほとんどであるため、生まれ育った環境や生活体験もA大学学生と異なることが予想される。対人関係や地域社会の状況から、本学学生のサポート源や実習で受けるストレスなどに違いが予測され、本学における実習サポートのあり方を考えるためには、本学学生の実習時における対児ストレスとソーシャ

ル・サポートの状況を知る必要があるのではないかと考えた。そこで本稿では、今後の実習指導体制やサポートのあり方を検討し、実習におけるストレスやドロップアウトへの対応を行うための基盤として、本学学生の実習時における対児ストレスとソーシャル・サポートの状況を調査しA大学との比較を行った結果を報告したい。

方 法

対象 本学学生 2 年生124名および関東地方の私立 A 大学短期大学部 2 年生249名

比較対象とした私立 A 大学短期大学部は、保育者養成に特に力を入れている大学として有名である。

時期 2002年 7 月から2003年 7 月にかけて実施

方法 質問紙調査法による集団自記式。回答に際しては、教育実習・保育実習時を想起してもらい記入してもらう。

尺度 ・学生用ソーシャル・サポート尺度（久田ら 1989）

・対児ストレス尺度（松尾ら 2001）のうち、項目吟味の上、本研究に妥当な項目を使用する（表 1）。

表 1 対児ストレス尺度

-
- | | |
|----|---|
| 1 | 実習時に子どもをたたきたいと思ったことがありますか |
| 2 | 実習時に実際に子どもをたたいたことがありますか |
| 3 | 実習時に子どもがだだをこねたり、我(が)が強いことで困ったり、悩んだりしたことがありますか |
| 4 | 実習時に子どもが泣いても世話をする気にならなかったことがありますか |
| 5 | 実習時に子どもと相性が悪いのではないかと悩んだことがありますか |
| 6 | 幼稚園実習時に子どもの排泄のしつけについて困ったり、悩んだりしたことがありますか |
| 7 | 保育所実習時に子どもがよく寝ないことについて困ったり、悩んだりしたことがありますか |
| 8 | 実習について友人と話したりすることがありますか |
| 9 | 実習について友人に話してほしかったことがありますか |
| 10 | 実習に行きたくないと思ったことがありますか |
-

結果と考察

有効回答は、本学85名（68.5%）、平均年齢は19.3歳（SD .54）であった。A 大学は166名（66.6%）であり、平均年齢は19.3歳であった（SD .57）。両大学学生間の年齢に有意差はなかった（ $t = .46$ $p > .05$ ）。

ソーシャル・サポートと対児ストレスの違い

大学を独立変数とし、ソーシャル・サポート得点と対児ストレス得点をそれぞれ従属変数とする t 検定を行い、両大学間の平均値の差をみた。その結果ソーシャル・サポート得点に有意差があった（ $t = 2.44$ $p < .05$ ）（表 2）。また、本学学生も A 大学学生同様に、実習時に対児ス

トレスを受けていることが確認された。

表2 ソーシャル・サポートと対児ストレス

		平均値	SD	t
ソーシャル・サポート	本 学	249.8	26.2	2.44*
	A大学	239.9	37.0	
対児ストレス	本 学	30.2	5.7	0.38
	A大学	29.9	7.0	
		本学 N = 85	A大学 N = 166	(* = p < .05で有意)

サポート源による違い

ソーシャル・サポートのサポート源に両大学間で差があるか否かを、同様に大学を独立変数、ソーシャル・サポート得点を従属変数とする t 検定を、サポート源の父・母・きょうだい・(今通っている学校の) 教員・友人知人ごとに行った。その結果が表3である。

母のみが有意であった ($t = 3.08$ $p < .05$)。本学学生の方が母からサポートの平均値が高かった (本学56.7, A大学53.6)。教師の値は、本学学生, A大学学生ともに低い値にとどまっている。本学学生の値が低いのは、野島ら (2003) と同様の結果である。

表3 サポート源による平均値の差

		平均値	SD	t
父	本 学	48.7	9.8	1.60
	A大学	46.5	11.1	
母	本 学	56.7	6.4	3.08*
	A大学	53.6	9.3	
きょうだい	本 学	47.9	10.8	1.09
	A大学	46.3	11.3	
教師	本 学	39.6	9.2	1.11
	A大学	38.2	11.4	
友人知人	本 学	56.9	6.1	1.78
	A大学	55.4	7.1	

(* = p < .05で有意)

対児ストレス下位尺度による違い

同様に、対児ストレスの下位尺度ごとに、t 検定を行った結果が表4である。「実習時に実際に子どもをたたいたことがありますか」($t = -2.02$ $p < .05$)、「実習時に子どもがだだをこねたり、我(が)が強いことで困ったり、悩んだりしたことがありますか」($t = 2.44$ $p < .05$)、「幼稚園実習時に子どもの排泄のしつけについて困ったり、悩んだりしたことがありますか」($t = -3.01$ $p < .05$)が有意であった。「実習に行きたくないと思ったことがありますか」は、有意差がなかった ($t = 0.81$ $p > .05$)。

表4 対児ストレスの平均値の差

質 問 項 目		平均値	SD	t 値
実習時に子どもをたたきたいと 思ったことがありますか	本 学	1.4	1.2	-1.73
	A大学	1.7	1.5	
実習時に実際に子どもを たたいたことがありますか	本 学	1.0	0.0	-2.02*
	A大学	1.1	0.6	
実習時に子どもがだだをこねたり、我(が)が強い ことで困ったり、悩んだりしたことがありますか	本 学	4.8	0.9	2.44*
	A大学	4.5	1.4	
実習時に子どもが泣いても 世話をする気にならなかったことがありますか	本 学	1.6	1.5	-0.08
	A大学	1.6	1.5	
実習時に子どもと相性が悪いのではないかと 悩んだことがありますか	本 学	2.8	2.0	1.20
	A大学	2.5	2.0	
幼稚園実習時に子どもの排泄のしつけについて 困ったり、悩んだりしたことがありますか	本 学	1.8	1.6	-3.01*
	A大学	2.5	1.9	
保育所実習時に子どもがよく寝ないことについて 困ったり、悩んだりしたことがありますか	本 学	3.1	2.0	1.62
	A大学	2.7	2.0	
実習について友人と話したりすることが ありますか	本 学	4.9	0.6	0.31
	A大学	4.9	0.7	
実習について友人に話して ほっとしたことがありますか	本 学	4.8	1.0	0.76
	A大学	4.7	1.1	
実習に行きたくないと思ったことがありますか	本 学	4.0	1.8	0.81
	A大学	3.8	1.9	

(* = $p < .05$ で有意)

住居によるソーシャル・サポートの違い

現在の住居を自宅・一人暮らし（下宿・アパート）・学生寮・その他に分け、住居によるソーシャル・サポートの違いをみたが、本学学生、A大学学生とも有意差がなかった。家族と同居していても、家族と離れ学生寮やアパートで暮らしていても、家族からのサポートは同じように受けていると感じていることが分かった。

自己評価と下位尺度の関連

自己評価と各下位尺度の相関係数を求めた結果、有意な相関関係にあった下位尺度が表5である。なお、自己評価は本学のための質問であるため、A大学との比較は行わなかった。

表5 自己評価得点と各下位尺度の相関係数

	ソーシャル・サポート サポート源 母	ソーシャル・サポート サポート源 教師	対児ストレス尺度 「実習に行きたくないと 思ったことがありますか」
自己評価	.256*	.222*	-.254*

N = 85 (* = $p < .05$ で有意)

自己評価と、ソーシャル・サポートのサポート源の母とは弱い正の相関が($r=.256$ $p<.05$), 教師とも弱い正の相関が($r=.222$ $p<.05$) あった。母と教師のふたつのサポート源からのサポートが得られていると感じている場合には、自己評価は良いものになるという関係があった。対児ストレス尺度の「実習に行きたくないと思ったことがありますか」は弱い負の相関があったことから($r=-.254$ $p<.05$), 自己評価と、実習時の対児ストレスの間は関係があることが明らかになった。

総合的考察

保育実習および教育実習時において、本学学生が対児ストレスを受けていることが分かった。これは、保育実習および教育実習時において学生は専門職と同じように対児ストレスを受けていたことを明らかにした筆者らの研究(2003)と同様の結果であった。子どもが好きであり、将来は保育者になろうとしている多くの本学学生も、保育実習および教育実習において、子どもとかかわった際にストレスを受けていた。本稿では教育実習時のストレスとして、対児ストレスを取り上げたが、専門職は対児ストレス以外にも職場環境や人間関係による様々なストレスを受けていることが明らかになっている。今回はそのひとつの側面としての対児ストレスであるが、実習後の感想や振り返りの中から学生も専門職と同様に、さまざまなストレスを受けていることが推測される。子どもが好きだからといってストレスを受けないわけではなく、また子どもが好きだからといって実習時のつまずきを必ず乗り越えることができるとは限らない。むしろ、子育てを支える現場で感じた様々なストレスは、実習中や実習を終えた学生が、子どもに対する感情や職業選択、人生計画に何らかの影響を与えることが推測される。

本学学生とA大学学生との比較においては、環境等が異なることから、ソーシャル・サポートと対児ストレスに差が生じるのではないかと予測されが、検定を行った結果、ソーシャル・サポートにおいて本学学生のほうが有意に高いことが分かった。サポート源による検定では、母親からのサポートにおいて、本学学生が有意に高かったものの、他のサポート源は差がなかった。住居によるソーシャル・サポートの違いについては、本学学生のうち自宅通学者は37名(43.5%)、自宅外通学者は48名(56.5%)であった。またA大学学生のうち自宅通学者は141名(85.0%)、自宅外通学者は25名(15.0%)であった。平均値求めたところ、自宅外通学者のほうがすべてのサポート源において高い値であった。そのため、自宅外通学者のほうが高いサポートを受けていると感じているものと思われたが、統計の上で有意差はでなかった。また、対児ストレスについては、本学学生とA大学学生の間に有意差はなかった。

実習時の対児ストレスとソーシャル・サポート間には関連性があり、適切なサポート源からの適切なサポートは、ストレスを軽減し精神的健康を維持することができる。身近な存在として認識し、自分との間に信頼関係があり、お互いに共感できるという条件を満たす人が適切なサポート源となりうるが、対児ストレスのみならず、実習における様々なストレスにおいて友人・知人との関係がサポート源として支えてくれる要因になっている。本学学生も、A大学学生同様に友人・知人が有効なサポート源として重要な役割を担っており、母親も重要なサポー

ト源の役割を担っている。

自己評価と、ソーシャル・サポートのサポート源2項目とは正の相関があった。サポート源として、母親または教師からのサポートが得られていると感じている場合には、自己評価は良いものになっている。適切なサポートには情緒的サポート・手段的サポート・情動的サポート・評価的サポートがあるが、母親は子育てを経験した者としての評価が行われ、大学教員からは学術的な側面からの評価が行われ、自己評価を決定する要因になっているものと推測されるが、それを支持する明確な手段を使用しておらず、今後の検討として残された。

自己評価と対児ストレス尺度の質問項目「実習に行きたくないと思ったことがありますか」については負の相関であったことから、自己評価と実習に行きたくないと思う気持ちとの関連は明らかになった。塗師（1995）、嶋崎ら（1995）、田中（1999）らからは、保育者効力感とストレス要因の関連を示されなかったものの、精神的健康を維持する要因になりうることを示唆され、保育者としての効力感を持つ人は、育児そのものに自信を持つことが、ストレスを感じにくいことが予想された。これを実習に行く学生にあてはまれば、つらい実習であっても、実習前の学習に対する良い評価や適切なサポートがなどによる良い自己評価は実習に対する自信につながり、ストレスを軽減し、ドロップアウトやドロップアウトに近い深刻な事態に至らないのだろうか。あるいは、高いストレスや実習に行きたくないと思わせる出来事がなかったから自己評価が良いのか。詳細な検討を行う必要がある。しかしながら、大学教員が実習時のストレス軽減に対し、有効なサポート源としての役割を担っていない中で、自己評価との教師のサポートの関連、自己評価とドロップアウトとの関連が明らかになったことは、大学教員のサポート方法によっては重要なサポート源としての役割を担う可能性も否定できない。

本学学生とA大学学生との対児ストレスとソーシャル・サポートの比較においては、大きな差異はなかったが、対児ストレス以外のストレスについては今後の課題である。また、自己評価との関連については、新たな知見が得られ、今後詳細に検討していきたい。

引用・参考文献

- 西沢哲(訳) 1999 虐待を受けた子どものプレイセラピー 誠新書房. 虐待を受けた子どものプレイセラピー2
- 西沢 哲 1999 ト라우マの臨床心理学 金剛出版
- 繁多 進 1999 愛着の発達 大日本図書
- 池田 由子 1979 児童虐待の病理と臨床 金剛出版
- 荒木 美幸・大石 和代・岩木 宏子・渡辺 鈴子・池田 早苗・達田志津子・小川由美子 2001 育児期のある母親に対するソーシャル・サポートと育児ストレスとの関連性 長崎大学医療技術短期大学部紀要 第14巻第1号 89—95
- 田中 宏二・難波 茂美 1996 育児ストレスにおけるソーシャル・サポート研究の概観 岡山大学大学院教育学部研究集録 第105巻 177—185
- 芳賀 道 2001 母親の育児ストレスに対する父親のソーシャル・サポートの緩衝効果について 大学院研究年報 第30号 211—218

実習における対児ストレスとソーシャル・サポートとの関連
—本学と他大学との比較—

- 刀根 洋子 2000 保育園児を持つ親のQOL—発達不安との関係— 小児保健研究 第59巻第4号
493—499
- 竹田小百合・岩立 京子 1999 ソーシャル・サポートが育児ストレスにおよぼす効果について —特定のサポート源の違いおよびサポートに対する必要度との関連から— 東京学芸大学紀要1部門 第50巻 215—222
- 久田 満 1987 ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題 看護研究 第20巻 170—179
- 嶋 信宏 1992 大学生におけるソーシャル・サポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究 第7巻 45—53
- 堤 賢・高橋 和一・西沢 哲・原田 和幸 1997 被虐待児調査研究—養護施設における子どもの入所前の経験と施設での生活状況に関する調査研究— 日本「社会事業大学研究年報」 213—243
- 森下 正康 1968 幼児期のパーソナリティ特性に関する母子間の類似性と養育態度 和歌山大学教育学部紀要 115—129
- 岡堂 哲雄 1996 家族心理学講義 金子書房
- 西坂小百合 2002 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育効力感の影響 教育心理学研究 第50巻 第3号 283—290
- 三木 知子・桜井 茂男 1998 保育専攻短大生の保育効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究 203—211
- 文 部 省 1998 幼稚園教育要領
- 嶋崎 博嗣・森 照三 1995 保育者の精神健康に関する研究—属性・職務上の背景からの検討— 筑波大学体育科学系紀要 149—158
- 和田 実 1991 対人的有能性とソーシャル・サポートの関連—対人的に有能なものはソーシャル・サポートを得やすいか?— 東京学芸大学紀要大部門教育科学 183—195
- 池田 由子 1987 児童虐待—ゆがんだ親子関係— 中公新書
- 岩田 泰子 1999 児童虐待の臨床的概念—児童精神科の立場から— 精神療法 第25巻 513—520
- 土井 靖子 2001 児童虐待に関する文献展望 聖徳大学大学院児童学研究科紀要 39—49
- 鶴飼奈津子 2002 児童虐待の世代間伝達に関する一考察—過去の研究と今後の展望— 心理臨床学研究 第18巻第4号 402—411
- 原 孝成 1995 幼児における友達の行動特性の理解 心理学研究 第65巻第6号 419—427
- 本城 秀次 1993 児童虐待—その現状と展望— 思春期青年期精神医学 第3巻第2号 183—207
- 本間 博彰 1999 乳幼児期の親子関係と児童虐待 精神療法 第25巻 530—53
- 野島 正剛・三好 和子 2003 教育実習時におけるストレスとサポートについて 日本心理臨床学会発表
- 高澤 和子 2001 看護学生の子どもに対する心理的距離について—保育所実習を通しての変化— 聖徳大学修士論文 未刊行
- 柏木 恵子 1998 結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達— ミネルヴァ書房
- L'Abate, L. 國谷 誠朗(訳) 1991 家族心理学と家族療法—比較と対照— 家族心理学年報9 新しい家族の誕生と創造 金子書房

謝辞

本稿を作成するにあたり，ご協力をいただいた聖徳大学臨床心理学科 三好和子先生，質問紙にご回答くださった学生 みなさんに心よりお礼を申し上げます。